

ならぬ、尙其他にても同様、殊更に幼稚園保育の爲めにと、著作してなくても、活眼を開いて活書を読めば、得る處は莫大である。海山の珍味を全く整えて、サアか上りと差し出さなければ、食べないとは飽食の贅澤人が云ふ事で、飢に瀕して居るならば、材料さえあれば一舉手一投足の勞は惜まない筈である。保姆の讀みものなき尙飢渴の感と同様なら、先づ圖書館に往つて一日を費せ、實に今日の嘆聲は夢の如く消ゆるであらう。

讀書の葉

小公子

故若松しづ子女史の譯、原書は、リットル、ロールド、フアントルロイといふ名で、外國でも有名な家

庭小説である。大分前に譯せられたので、今日では、もう忘れて仕舞はれたかの様にもあるから、更に茲に紹介しよう。

主人公は、セドリツクといふ可愛い子供、父は英國の侯爵の第三子、母は亞米利加の身分なき婦人、此婦人、結婚した、めに父は、故郷の侯爵から殆んど勸當同様になつた。其中に此子が生れて、間もなく父は死去した。所が、侯爵家では、相續人がなくなつてとうとう其相續者としての運命は此可憐なセドリツクに回つて來て、米國から英國の侯爵家に迎へられることになつた。然し、此侯爵即ちセドリツクに取つてのお祖父さんといふ方は子供の愛などいふ事は知らない上に非常な癡癡な頑固な方で、殊に米國嫌と來て居るから、セドリツクのお母さんを惡むことが甚しく、仕方なし

に子供丈けは御殿へ入れても母はどうしても入れない。御殿の近邊へ別に家を興へて、母を住はせて置くといふ始末。然るに、此セドリツクは、丸で天の使の様に出来て居て、小さい時から、頼りないおつ母さんを慰めるのが、お父さんのなくなつた後の自分の役目だと信じて、小さい心でさまざま工夫しておつ母さんを慰める。これはお父さんがおつ母さんを常に親切にして居る處を終始見て居たからで、のみならず、愛の化身ともいふべき此子供は、其周囲の人を喜ばしめないといふ事はない。生れてから、嫉妬とか情疑とか其他の惡徳を経験したことの無い身に取つては、自分にもその様の汚心の起り様もないので、人は皆自分と同じ様に清い美しいものだと思つて居るのである。従つて此子供嫌ひな頑固な疝癩なお祖父さんも、

どうしても此子供丈けは愛せずには居られなくなつて来た。慈善などいふことは一つも知らないのであるが、夫でもセドリツクは、お祖父さんほど慈善の方は世の中にないと信じ且つ公言して居る。といふ有様で、とうとう此お祖父さんは、セドリツクの愛の爲めに、全く新しい性質の方に變つて仕舞ふ。そうこうして居る中に、そこへ一人の女天一坊が起つて、自分こそは、侯爵家の總領息子の妻で、夫はなくなつたが侯爵家の相續人たるべきものは、私の子供であると名告つて出る。所が、セドリツクに心から打ち込んで居るお祖父さんは、どうしても之を信じない。然し向ふにはいさゝか偽りの證據を持つて出る。お祖父さんは夫が悪くつて仕様がな。其惡しみると、セドリツクの愛とは、遂に此頑固なお祖父さんをして、

